

# 本宗の本尊觀概説

半

訥

此稿は野衲二十年前、本佛信仰觀と題して篤信者某氏に對して試講せしもの、其概要は我が宗祖を通じて本佛論を標榜し以て我が宗徒の信仰基準とし、又我が國風の家族制度の根幹ともなし得べき歟と結意す、而して該稿散逸し今や全く收束するに由なし、只僅に兩三紙を函底に存するのみ、偶々櫻榮學生來り此斷片を強徵す、乃ち首標の如く改題して當時の輪廓の半面を點示して寄稿す、是れ偏に同窓學士の研究を促すと同時に愚説の訂補を切に要望す。幸に諒せよ。

夫れ我が日本帝國に生を受けて苟しくも主師親三德具足の天皇陛下の尊崇なるを忘失せば國民として全く存在の價値なく非國民たるが如く

若し日蓮宗徒にして無始無終無作三身久遠實成の本佛を渴仰し信敬するにあらざれば正しき信仰の所對を失ひ日蓮宗の檀信徒たるを得ざるなり、故に吾祖大士は開目抄の劈頭に弟子檀那の的に所尊所修を示して云く

『一切衆生の尊敬すべきもの三あり所謂主師親これなり(人)また習學すべきもの三あり所謂儒外内これなり(法)』

とかくして夫々人法並明して前去後就し、儒外を排除して入眞方便となし(初丁三行五丁末二行)内道に至つて法にあらば五十餘年間一代の聖教(上五丁左末行)に歸せられ、人に於ては一切衆生の大導師大眼目大橋梁大船師大福田なる大覺世尊(上五右末二行)に結歸す(以上序分)然るに此大覺世尊始成正覺にては泛爾に未だ久近を分たず(上廿二右)

『これら程のいみじき御經に(乃至)久遠實成の壽量品を説きかくさせ給き珠の破れたると月に雲のかくれると日の蝕たるがごとし不思議なりしことなり』(上廿五左)『本門十四品も涌出壽量の二品を除ては皆始成を存せり(乃至)九

界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備りて眞の十界五具、百界千如一念三千なるべし、かうて願れば華嚴經の臺上十方、阿含經の小釋迦、方等、般若、金光明經、阿彌陀經、大日經等の權佛等は此壽量の佛の天月、暫く影を大小の器にして浮給を諸宗の學者等、近くは自宗に迷ひ遠くは法華經の壽量品を知らず。水中の月に實月の想をなす、(乃至)天台曰天月を識らず但池月を觀る云云』

(下二左)『始成の佛ならば所化十方に充滿すべからず(乃至)天台云、分身既に多し當知成佛の久しきことを云云』

等と開展し來りて彼々の權佛を廢し去る。即ち知る冒頭の人の歸結する所、正しく本佛に在ること。然るに此の本佛の三徳たる、たと本佛身上に止らずして一轉して末法今時に於て遣使還告の本僧にまで延長せらる、これ本鈔獨自の法門なり。されば(上三十丁右末三)ヨリ(數丁ニワタツテ)『我身法華經の行者に非ざるか』と疑をかまえて勸持品の二十行の偈は

『日蓮一人これをよめり』

日本國に此を知る者は但日蓮一人也』

『誰の僧が數々擯出と度度なかさる、日蓮より外に日本國に取出さんとする人なし(下廿八左)』

『法華經の行者は誰ならんと求めて師とすべし一眼の龜の浮木に値へるなるべし(下廿九)』

『我日本の柱とならん(主)我日本の眼目とならん(師)我日本の大船とならん(親)』

かくて終に三大誓願となる蓋し冒頭の人(上五右)『大覺世尊○大導師大眼目』の文となり下四十二左三行三大誓願の文となり。首尾相呼應して本佛は本僧に結歸せらる。即ち末法今時の大導師、大依止處、大歸依は神力別付の本化上行の再誕我身日蓮即ちこれなりと定め給ふ、思ふに歸依本僧は歸依本佛となる。即ち歸依本僧日蓮は歸依本佛釋尊なり。

故に末法當今の可歸依の人は生身日蓮これなりと垂迹生身の日蓮を開發して本地法身の上行日蓮を顯示し給ふなり。  
爰に注意すべき事は此三徳に就て、かの興門派の主張せる宗祖本佛論をみるに世尊を在世の教主とし、宗祖を末法  
本因の教師となす。蓋し此主師親の三徳が祖師に歸すると觀たるは可なるも吾祖を崇むあまり本佛を排し輕視するは  
非なり本佛釋尊にあらずして何ぞ上行菩薩あらん

さて此の遣使還告末法能弘の大導師たる上行菩薩の所弘の本法は如何、其の本佛の内容如何、かくて慮ふに當開目  
抄にありては文意、本迹判にありと雖其文の當相未だ權實判を出でず。遙かに霞を隔て、花を觀るの思ひあり。これ蓋  
し後に吾祖當身一期の大事たる後五百歲始觀心本尊抄の御述作ある所以なり、そは本尊抄云く

『迹門十四品涅槃經等の一代五十餘年の諸經、十方三世諸佛の微塵の經々皆壽量の序分なり。一品二半よりの外は小  
乗教邪教未得道教覆相教と名く、其機を論すれば德薄垢重、幼稚貧窮孤露にして禽獸に同じ云云』と

蓋し壽量文底一品二半の實義は身土常住、十界三千の依正二法の常住を宣顯す。換言せば事の一体三法の外なき也そ  
れを義約したるが所謂本尊抄の四十五字也

本國土妙  
『今<sup>ナリ</sup>本時<sup>ナリ</sup>娑婆世界<sup>ナリ</sup>、雖<sup>ナリ</sup>三災<sup>ナリ</sup>一<sup>ナリ</sup>出<sup>ナリ</sup>、四劫<sup>ナリ</sup>常<sup>ナリ</sup>體<sup>ナリ</sup>淨<sup>ナリ</sup>土<sup>ナリ</sup>佛<sup>ナリ</sup>既<sup>ナリ</sup>過<sup>ナリ</sup>去<sup>ナリ</sup>不<sup>ナリ</sup>滅<sup>ナリ</sup>未<sup>ナリ</sup>來<sup>ナリ</sup>不<sup>ナリ</sup>生<sup>ナリ</sup>所<sup>ナリ</sup>化<sup>ナリ</sup>以<sup>ナリ</sup>同<sup>ナリ</sup>體<sup>ナリ</sup>此<sup>ナリ</sup>即<sup>ナリ</sup>三<sup>ナリ</sup>心<sup>ナリ</sup>三<sup>ナリ</sup>千<sup>ナリ</sup>  
具足三種世間也』  
ナリ本果妙  
衆生法妙  
心法妙  
念々生起ノ妄心

これを文約せるもの實に妙法五字なり。末法の行者此妙法五字の受持（三十二字体惣括）に因りて四十五字の法体に證  
入せる姿が壽量品の『一心欲見佛不自惜身命時我及衆僧俱出鷲鷲山』の姿、換言せば如來如實知見の六句の知見、我此  
土安穩等の十句の偈文の意を得て佛眼を開きたる姿が八十九字の体相段能所一体の相なり。當家の大曼荼羅本尊は此  
證入したる姿、即ち本門虛空會上八品の儀相を示したるものにして

「其ノ本尊ノ爲<sub>レ</sub>ラ<sub>ク</sub>体本時ノ娑婆ノ上<sub>ヘ</sub>ニ寶塔居<sub>レ</sub>空ニ塔中ノ妙法蓮華經ノ左右ニ釋迦牟尼佛多寶佛釋尊ノ脇士上行等ノ四菩薩文殊彌勒等<sub>ヘ</sub>四菩薩ノ眷屬トシテ居<sub>コ</sub>末座ニ迹化他方ノ大小ノ諸菩薩<sub>ハ</sub>萬民ノ處ニシテ大地ニ如<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>カ<sub>ル</sub>カ<sub>ル</sub>雲閣月郷<sub>一</sub>十方ノ諸佛<sub>ハ</sub>處ニ<sub>ク</sub>マ<sub>フ</sub>大地ノ上<sub>ニ</sub>表<sub>ス</sub>ニ<sub>カ</sub>迹佛迹士<sub>一</sub>故也

と云ふ、これ本尊の体相、能所一体の相貌、三十三字の行相によりて觀心證明せる姿なり、時我及衆僧俱出靈鷲山の姿なり、四十五字の圖現なり、佛界は無始の九界所具の佛界にして九界は佛界所具の九界にして十界本有迷悟一体不二なり、即ち無始の十界互具一念三千なり。若行者の一念妙法に約せば自己の一念即是法界圓融微妙の法身にして三千俱成妙法なれば一念と法界と無二無別と示せば生佛同体、父子一体に依正不二なり、本尊妙に云く

『釋尊ノ因行果徳ノ二法ハ妙法蓮華經ノ五字ニ具ス我等受<sub>ニ</sub>持<sub>ス</sub>此ノ五字ヲ自然ニ讓<sub>リ</sub>與<sub>ヘ</sub>タマフ彼ノ因果ノ功徳』と

故に行者直ちに慈悲の本体たる此の御本尊に對向して本佛果海中に在りと確心し無作の心地に確立して信の一字善く其佛智を買ひ唱題の一行觀心その益を得、名字の即成、其要これに過ぎたるはなし、故に妙法五字の信唱を勸む即ち觀別の觀なし、全く妙法の信唱にあるのみ、以信代惠、信即觀、これ事觀の要目とす

『信の一字を妙覺の種子と定む』宜なるかな。